

『フェンスレス』オンライン版（第三号） ● 特別付録 資料2

---

# 「小林多喜二全集」の歴史（貴司山治）

## あるとき的小林多喜二（徳永直）

附・総目次 『小林多喜二全集（月報）』新日本文学会・小林多喜二全集刊行会編

一九四八年に刊行が開始された戦後初の『小林多喜二全集』は、今日につづく「多喜二全集」の基礎となった全集である。小林多喜二全集編纂委員会(初回配本・第二巻奥付では小林多喜二全集刊行会)が編集を行い、新日本文学会から発行、日本評論社から発売された。委員会のメンバーは江口渙・勝本清一郎・貴司山治・窪川鶴次郎・蔵原惟人・壺井繁治・手塚英孝・中野重治・宮本顕治。当初、全十一巻、別冊二巻の予定で刊行が開始されたが、実際には第九巻までしか刊行されていない(最終配本Ⅱ第八巻は学芸社発売)。

この全集の月報には、多喜二と直接に交流のあった作家たちのエッセイが多数掲載されているが、今日では参看が困難な資料となっていた。幸い、浦西和彦氏が収集された八回分の月報を参看させていただくことができたので、その目次を以下に掲載する。また併せてその中の二編を紹介する(漢字を新字体に改めた)。

貴司山治「小林多喜二全集」の歴史」は、戦前版多喜二全集についての貴重な証言である。多喜二作品を守り、後世に伝えようとした貴司の努力については、中野重治が「人間のほんとうの積極性」(書かれるべき小林伝について)という言葉で表現している。戦前版および新日本文学会版全集の編纂経緯と貴司の関わりについて詳しくは、伊藤純氏の論文「小林多喜二全集の編纂過程」(『立命館言語文化研究』二巻三号、二〇一二年)および「小林多喜二全集」の編纂過程〔戦前編〕(『フェンスレス』創刊号、二〇一三年)を参照されたい。

徳永直「あるとき的小林多喜二」は、上京直後の多喜二の面影である。気がつけば労働者たちの間に溶け込んでいる多喜二に対する羨望のまなざしさえ感じられる文章であり、そのような記憶をとどめていたということも含めて、徳永直という作家の観察眼や、二人の人

間性が表れているようで興味深い。

月報(一)の宮本百合子「小林多喜二の今日における意義」は『宮本百合子全集』第十三巻(新日本出版社 一九七九年)に、月報(三)のなかの・しげはる「感想と思ひ出」は『中野重治全集』第十八巻(筑摩書房 一九七八年)に収録されている。現状では第九回の月報は確認できていない。情報をご存じの方は本誌編集部までご教示いただきたい。

(編集部)

## 「小林多喜二全集」の歴史

貴司山治

1

小林多喜二は一九三二年(昭和七年)四月ころから非合法生活にうつって、日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)の書記長として、又その上級機関である日本プロレタリア文化連盟(コップ)の責任者として、かつ日本共産党員として、一年たらずのあいだ、プロレタリア文学・文化の指導のために活動した。(こんどの全集の評論集(二)に収めたのはみなその時のかれの活動をあらわす論文である。)

そして一九三三年二月二十日、小林は、この論文にあるようなかれ

の活動をにくだ日本政府の警察のために、残虐目もあてられないゴウ間によつて殺された。

二月二十四日、友人・家族により辛うじて葬式をすましたあと、三月十五日の築地小劇場における大衆的な小林芳農葬までのあいだに、ナルプ中央常任委員会では「小林多喜二全集」の刊行を決議して、四月には「蟹工船」「不在地主」を収めたその第一回配本（第二巻）を出した。

一方、コツプでも小林芳農葬記念事業として、かれが命をかけてたかかった時期の論文（本集収載のもの）をあつめた「日和見主義に対する闘争」一巻を出版した。その他、五月には、私共の企画により組織外において改造社から「不在地主・オルグ」「地区の人々」「蟹工船」「工場細胞」国際書院から「転形期の人々」九月には遺稿の部分をふくめた「転形期の人々」を改造社からそれぞれ刊行した。これらの総刊行部数は十数万に上った。

以上の活動は、小林の虐殺に対する当時のプロレタリア文学運動からの逆襲として、計画され、実行されたものである。

## 2

その後、コツプでは「小林多喜二全集」刊行の意義を評価して、これをナルプからではなく、コツプから出すべきである、と決議して、全集発行の仕事のコツプへうつすことにきめた。

ナルプ中央常任委員会が、コツプのこの決定に不満をもつたのはやむをえない事実であったが、決議を承認して第一回刊行以後の仕事はコツプへ引きついだ。

しかしコツプはその時うちつづく弾圧によつて共産党同様の非合法状態におかれ、つぎつぎに働き手は検挙され、活動は思うようにな

らず、小林全集の継続刊行はいつまでたつても実行にうつせず、そのままではお流れになつてしまひそうであつた。

一九三三年の初夏、私は共産党中央部の幹部として活動していた宮本顕治から「小林多喜二全集」の発行は党中央委員会の仕事として行うことに決めた。自分が中央委員会から委任をうけて処置することになつたので、君が合法面でのその仕事の責任者となつてやつてもらいたい。」

との相談をうけた。私は、ナルプからコツプへ、コツプから党中央委員会へと、だんだん高いところへ、小林多喜二全集の計画をもち上げて行くことは大へん結構だが、計画を実現するには逆の方法をとらなければならぬ、ということ宮本に強調した。宮本は、だまつて私の意見をきいた上、私のやり方に一任した。

私は、六十何人のプロレタリア文化人やその他の自由主義的、進歩的文化人をあつめた独立の、大衆的な小林多喜二全集刊行会を設立して、一九三三年の夏から秋にかけて、前金と基金の募集を行い、「党生活者」の伏字なし、原文どおりの組版を終えた。しかし、プロレタリア文化団体は、その時もはや四分五裂の状態で、基金、前金合せて三百円余り集つたが、刊行は不可能であつた。

刊行会が党中央部（宮本）に直結した合法活動だと気づいている者は幸いに一人もなかつたが、この仕事やらそのほかの、当時の党活動への協力やらで、たえず宮本と連絡して仕事をすすめて行く内に、協力者としての池田寿夫がやられ、杉本良吉がやられ、ついに宮本顕治もまた検挙されて、私は合法面にとりのこされてしまひ、どうすることもできなくなつた。その内に私も亦検挙されてしまつた。（この時つくつた「党生活者」の紙型はいまものこつていて一九四六年に大阪の民衆書房から出版した「党生活者」の紙型がそれである。）

一九三五年に、私は幸い又自由をとりもどしたので、一存でやはりこの「党委託」の仕事をつづけることにきめ、ナウカ社を發行所として、小林多喜二全集を小説だけ三冊、論文はどうしても出せそうもないのでのこし、代りに書翰集、日記各一冊を編纂して、合計五冊を刊行した。この發行部数合計約二万である。

この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごしの仕事となつた。このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などには相談にあずかつてくれる人もなく、多くの旧ナルプの文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であつた。おかげで私はこの仕事をひとり占めにすることができて、ずいぶん楽しかつた。もつとも、この仕事は「党委託」の仕事であるのを知つていた中野重治、宮木喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた。

そういうことは知らないまま、私の助手として松原宏遠、丸山義二、塩田民夫（塩田はナウカ社員として）がはたらいてくれた。書翰集のためには故村山<sup>カズ</sup>篤子が長いあいだむくいなき協力をつづけてくれたのがいまも忘れたい。書翰と未刊原稿のためには小林三吾がはたらいた。三吾のかけには、斎藤次郎その他の小林の旧友がはたらいてくれたのだが、その時は名を秘していて十数年後になつてわかつた。

そして、ふりかえつてみると小林全集刊行の過去のたたかいは、これに参加してはたらいだ多くの人々の内、私をはじめ、黨員でない者が中心となり、黨員はそれに助力する格好で推進されたのが特徴である。

それらの点も幸いに正常な形にうつされる時がきて、全十一巻、別

冊二巻という小林多喜二全集の決定版が世に出るはこびとなつたことは、祝福にたえないのだけれど、私にはいまになつてこの立派な全集をみることでできない杉本良吉、池田寿夫、村山篤子らの幻がなくなしくてたまらない。

「小林多喜二全集月報（三）」所収

## あるときの小林多喜二

徳永直

それが秋だつたか、冬だつたか、思いだせないけれど、彼が北海道から上京してきてから、そう永くは経っていない頃だつた、ということとは、記憶のぜんたいとしてわかる。私が巢鴨の、空蟬橋のちかくに住んでいたところで、棟割りになつている二階で、私の家をはじめたずねてきてくれた彼と話していた。

「ぼくを、労働者のところへ、つれていつてくれないかネ」

あぐらをかいたからだを、前こごみにして、そつぜん、と彼がいつた。

「印刷労働者しか知らないよ」

と、いう意味をこたえると、ああ、いいよ、というふうに、うなずい

た。

それから、ちよつと首をかしげたりして、ためらうふうがあつて、  
「みんな………」

と、いった。みんな、あれでいいのかな、という意味のことをい  
た。みんな、とは、当時の作家同盟の人々のことで、つまり、労働者  
はなれて生活しているようだけれど、いいのかな？ という意味で  
あつた。

なんと、そのとき私がこたえたか、おぼえないけれど、彼は北海道  
での、彼のしきたり、労働者との接しよくしている容子、といったも  
のを、ちよつと話した。

それから数日たつてからだと思うが、彼を案内して、労働者の文学  
サークル（べつに名前があつたと思うが、性質はそんなもの）の集  
りへいった。全協の出版印刷の、若い文撰工I君というのが連絡して  
くれて、私の家から二三丁しかない、巢鴨刑務所の塀にちかい、古い  
二階家にゆくことになつていた。

もう暗かつた。電灯がついていて、軒下のくらがりから、坊主頭の  
I君がでてきて、金属の連中もあつまつていると、私につげた。I君  
には、前もつて小林もゆく、と話してあつたから、彼がそうしたのか  
も知れない。

二階の室には二十人くらいいた。私の知らない顔もたくさんあつ  
た。一緒にあがつてゆくと、みんな小林をみた。そこで彼を紹介した  
のは、私ではなかつたと思う。

「——三・一五の作者——」

という、誰かの紹介にあつた言葉が、ざわつと、一座をうごかし  
て、赤いシヨールをひざにのせている女の人などが、いずまいなおし  
た顔つきを、いまもおもいだすことが出来る。

小林は最初、壁にはりつくようにしてすわつていたが、私が小便に  
おりて、軒外で見張りをしているI君と、ちよつと話してから、二階  
にもどつてゆくと、もう、小林の笑い声が、階段のところまできこえ  
てきた。

空気がいつべんに変つていた。小林は、煙草のさきが、鼻の頭にく  
つつくように、上むきにくわえて、雪のつもつたたかさを示すふう  
に、片つぽの手を、てのひらを下に、たかくあげて、しやべつていた。  
壁ぞいの、ちかくの人々は、そつちへ首をのぼしたり、女の連中で  
は、笑い声をシヨールでおさえているのもいた。

その晩、彼が何の話をしたか、おぼえないけれど、そのときは、北  
海道風の風物、労働者のくらしのことを、語つていただけ、よく記  
憶している。そして、私がちよつと便所におりたあいだに、最初の、  
あの緊張した空気が、たちまちに変つて、小林が、いつの間にか、労  
働者たちの仲間にはいつてしまつているのが、印象にのこつていた。

それから、それより前だつたか、後だつたか、彼を大塚駅へおくり  
がてらゆく途中、省線線路の土堤のうえを歩いたとき「太陽」何とか  
いう、印刷のインクを製造する工場だつたと思うが、土堤むきに、ち  
ようど窓があいていた。二人でのびあがつてのぞきこんでから、私が  
ゆこうとすると、とつぜん、小林の——よう——というのが、きこえ  
た。ふりむくと、窓越しに、彼は笑いながら、工場の中の人々へ、手  
ふつてみせているのだつた。（一九四九年三月）

「小林多喜二全集月報（六）」所収

総目次『小林多喜二全集（月報）』

新日本文学会・小林多喜二全集刊行会編

・広告等は省略した。  
 ・月報（一）（二）（四）には年譜が掲載されている。  
 ・月報（一）（二）のみ発行日の記載がある。（三）以降の発行日は全集奥付の記載に拠っている。

月報（一） 一九四八年九月一日発行（第二卷）

小林多喜二全集の発刊にあたって

ささやかな思い出

蔵原 惟人 一〇二  
 壺井 栄 二〇三

月報（二） 一九四九年二月一日発行（第三卷）

小林多喜二の今日における意義

あのとき

宮本百合子 一〇二  
 土方 与志 二〇四

\*第三卷奥付では二月二〇日発行

月報（三） 一九四九年六月三〇日（第九卷）

小林多喜二の評論その他

「小林多喜二全集」の歴史

宮本 顕治 一〇二  
 貴司 山治 二〇四

月報（四） 一九四九年九月一〇日（第七卷）

感想と思い出

なかのしげはる 一〇二

月報（五） 一九四九年九月三〇日（第六卷）

正しいアドヴァイス

「爪立ち」についての雑感

江口 渙 一〇二  
 金 達寿 二〇四

月報（六） 一九四九年十一月三〇日（第一卷）

多喜二についての小さな感想

あるときの小林多喜二

壺井 繁治 一〇二  
 徳永 直 二〇三

月報（七） 一九五〇年三月二〇日（第四卷）

汚辱の歴史

序曲（\*詩）

中島 健蔵 一〇二  
 岡本 潤 二〇四

月報（八） 一九五〇年七月三〇日（第五卷）

「安子」について

二月二十日をめぐる感想

佐多 稲子 一〇二  
 松本 正雄 二〇四